伝えよう伝統芸能　ワークショップ弥彦薪能

新潟薪能運営委員会（代表　長谷川義明）

実施日　平成 27 年 7 月 11 日　弥彦村の弥彦小学校
平成 27 年 9 月 22 日　弥彦村の彌彦神社

真剣な表情　食い入る眼

まず、小学生たちの食い入るような真剣な眼差しを見てほしい。小学生にとって、能は難しいかな、分かるかな、と心配していたが、杞憂だった。素晴らしいもの、いいものは、子供たちの心に、目に届くというのが分かった。伝えよう伝統芸能と銘打って、弥彦小学校でおこなったワークショップは大成功だった。

「これは驚きだ」。村長も感嘆

本番の彌彦神社での弥彦薪能も、会場に人があふれるほどの盛況で、700 人が鑑賞し、これまた予想以上の大成功だった。弥彦村の小林豊彦村長は「この小さな村で、鑑賞に来てくれるか心配だったが、日本の伝統芸能に対する関心の高さが分かった。子どもたちも最後まで真剣に見ていたのが印象的だった。村外からの人も多かった」と新鮮な驚きで話し、文化の大切さを改めて実感し、継続開催を模索し始めた。

1．はじめに

日本の伝統芸能は、愛好家が減少気味で各団体とも若者らをどう取り組むかが喫緊の課題となっている。600 年以上の歴史がある「能」もご多分に漏れずで、底辺の広がりが大きな課題となっている。伝統芸能に子供のころ触れた人は、将来日本の伝統芸能のファンになってもらえる率が高くなるだろうと考えて、能や日本の伝統文化に親しんでもらう子供向けのワークショップを企画した。

2．日本の伝統芸能「能」に親しもう　弥彦小学校ワークショップ

平成 27 年は弥彦神社で薪能を半世紀ぶりに行う計画があったため、弥彦村の子供を対象に考えた。当初、希望者 30 人位を対象に実施する予定だった。弥彦村や教育委員会と打ち合わせをする中で、弥彦小が協力してくれることになった。「中央の能楽師に接して、能、伝統芸能を学ぶのはまたとない機会」という校長らの積極的な理解で、５、6 年生全員を対象に授業の一環として実施することが決まった。

7 月 11 日に弥彦小体育館で行った。当日は児童 170 人と父母 20 人、教師が参加。解説より体験に重きを置いて実施した。学校には事前に能についての解説書を送り、基礎的な部分を前もって学習してもらった。

当日は、観世流能楽師の中村裕、政裕父子が講師を務め、中村裕さんが能の解説をし、きらびやかな衣装を披露した。

そして能面をかざし、鼓の音を楽しんでもらった。能面は表情がないといわれるが、「ちょっと面を下向きにすると悲しい表情になり、少し上向きになると笑った明るい顔になる」という説明に、子供は微妙な変化に興味示していた。続いて二人が謡をうたい、児童からも「高砂」の一節を一緒に歌ってもらった。

初めての挑戦で、最初遠慮がちな声だったが、「ともかく大きな声で」という注文に元気よく声を出していた。「能はすり足という歩き方が基本で重要」という説明を受け、児童全員からすり足を体験してもらった。児童 6 人が代表して仕舞の「高砂」を体験した。扇子一つとってもなかなか開くことができず首をかしげての体験だった。足運び、手と扇子のさばき方を教わりながら舞ったが、単純な動きのようでも思うような動きができ演者の真似をしながら体験していた。終わる頃には興味がわいたようで、見守った児童も大きな拍手を送っていい雰囲気になった。最後に、弥彦薪能で演じられる演目「菊慈童」の一番の見どころを中村裕さんの謡に合わせ、政裕さんが舞った。

戸外で 35 度を超える酷暑で体育館は蒸し風呂状態で、たらたらと大粒の汗を流して舞う真剣で厳粛な演技に、児童は引き込まれて真剣な目で見つめて鑑賞していたのが大変印象的だった。

能に限らず、日本の伝統芸能の素晴らしさを実際に体験してもらう、本物のいいものを見てもらう機会を作る大切さを実感した。日本の伝統芸能を広めるのは本来、国や教育界の仕事だが、この研究助成事業のおかげでわれわれボランティアの微力な団体でも「能の素晴らしさを次世代の子に伝える」という初期の目的を達成でき貢献できたと感謝でいっぱいだ。

３．弥彦小学校ワークショップ　子供の感想文

「室町時代、観阿弥、世阿弥親子により「能」が完成したと知りました。たくさんの人に愛され、保護され、受け継がれてきたと思いました」（6 年女子）

「実物の能面はあまり関心がなかったけど、能面の角度をほんの少し下げたらなんか悲しそうな顔になり、逆に、ほんの少し上げたらうれしそうな表情になって小さな動きで表情が変えられるなんてすごいなぁと思いました」（6 年男子）

「実際に生で見ると、迫力があって目を離せなくなりました。まばたきをするのを忘れてしまいました。すてきな舞を見て歴史に興味がわきました」（6 年女子）

「つばでぬらすことにより良い音がでます「ぽん」という音が体育館にひびき感動しました」(6 年女子)

「能はおとなしいんだろうと思ったら、堂々とした声、切れのある演技に迫力というかエネルギーを感じました。伝統や文化をぼくたちで守っていきたいです」(6 年男子)

「能面を付けていなくて舞っていても、私には能面を付けているように見えました貴重な体験ができました」(6 年女子)

「佐渡と世阿弥と能についてもっと知るため自学で調べてみたいと思います」(6 年男子)

「つまらなそうと思っていたけど、実際見てこんなに奥が深いんだな、と体で感じることができました。次世代に語り継いでいきたい、熱い思いを感じ感動しました」(5 年女子)

「今度は私たちが、家族やいろんな人に伝えていきたいです」(5 年女子)

4. 弥彦薪能

9 月 22 日午後 5 時半から、弥彦神社で薪能を開催した。帳が下りた杉木立に囲まれた厳かな雰囲気の神社境内で、薪を焚き、月明かりも差すという好条件の環境のなかで開催できた。ピーッと笛の音が静寂を突き破り、鼓が心地よく響く。喜多流が仕舞「高砂」「八島」「三輪」「是界」の 4 曲、観世流が能「菊慈童」を披露した。

開演 3 時間も前から続々人が集まり始め、長蛇の列になった。小さな村なので、「200 人も来てもらえれば」「空席が目立ったらどうしよう」などと心配していたが、これも杞憂で 700 人が足を運んでくれ、地元はもちろん新潟市や新発田、三条・燕市など各地からきていた。最後まで薪がはじける舞台で演じられる幻想的な世界を心行くまで楽しんでいた。

弥彦は人工の光がなく闇の中に舞台が浮かび上がり、身が引き締まった思いで観ていた。「演者さんの厳かな舞は素晴らしく、ひしひしと伝わってきた」「かがり火を焚いたなかで、いいものを見せていただいた。日本の文化の素晴らしさを再認識した」「演者が舞殿の床を踏み鳴らすと、その音が言霊のように弥彦の森に吸い込まれているようだった」そんな感想が聞かれた。

弥彦小学校で、父母や児童にチラシを配ってもらうなど、ワークショップで学んだ能を実際に鑑賞してもらうべく呼びかけた。子どもの姿も多く見られ、教育長はじめ教育委員、教師、父母など学校、教育　関係者が多く鑑賞してくれた。林順一教育長は「児童が多いのにびっくりした。ワークショップで興味がわいたのでしょうか。

今後も日本の文化の素晴らしさを学んでいきたい」と喜んでおられた。
能を鑑賞するだけでなく、神秘的な雰囲気を作ろうと、舞台に通じる参道の足元に、ろうそくの明かりを灯した。１２０個を並べ、漆黒の杜の闇に浮かび上がる明かりはいっそう幽玄さを醸し出していた。

５. まとめ（成果と課題と展望）

世界遺産にも認定され６５０年の伝統を持つ能だが、「難しくてよく理解できない」など、ファンは減少傾向が続く。能楽界も危機感を持っているが、よい処方箋がないのが現実だ。

日本ではないが、こんなデータがある。子供のころ親に美術館につれて行かれた子は、大人になってから美術館に行く割合は高い。日本の伝統芸能に子供のころ触れた人は、将来能、日本の伝統文化のファンになってもらえる率が高くなるだろうと考えてのワークショップだった。

① **教育的効果**　結果は、狙いが当たった。小学生に能、日本の伝統文化の素晴らしさが理解できるなとも思ったが、良いものは子供のハートにストレートに伝わるということが分かった。真剣に見聞きし、蒸し風呂のような暑さのなかでざわつくこともなく、皆真剣に能楽師の話を聞き、舞や謡などに引き込まれていた。そして児童から「もっと学びたい」「自分で調べたい」「いろんな人に伝えたい」という声が出ているという。

② **文化の醸成**　弥彦村でも、地域の反応に「次の年も引き続きやっていきたい」と認識を新たにして、模索を始め、新潟薪能運営委員会にも協力、相談の依頼が来ている。　人口8400人の小さな村での薪能開催、どれだけの人が来るか心配したが、７００人ｎｏ鑑賞者で満席、小林豊彦村長は「弥彦の文化度の高さを見直した」と瞠目していたが、能のワークショップ、薪能の開催は、文化を求める村民の眠っていた目を覚まさせた。村長は「村民を見直した、継続して開催し、村民の文化度をより高めたい」と話していた。

③ **地域の活性化**　観光立村の弥彦は、温泉を中心とした観光と農業が基盤の村だが、温泉と神社だけでは誘客が難しい時代である。薪能など文化的要素を加えてアピールすることがこれからの時代を生きる方策でもある。その意味でも薪能と文化を温泉、観光と結び付けて誘客し地域の活性化にもつながると思われ、今回その芽生えが生じたように思われる。地域活性化の新しい動きにつながりそうだ。

④ **課題**　一番大きな課題は、資金問題と地域の協力、広がりだ。プロの能楽師を呼ぶと、かなりの費用が必要で、薪能を実施すると数百万円単位のお金が必要である。市民有志で作る一民間団体での力では難しい面がある。せっかく芽生えた児童の興味を継続して引っ張るうえでの大きな壁になっている。
地域にどう広げていくかが次の課題である。地域でも今回のワークショップは高く評価しており、その面では地域とともに歩める土壌はあるように思う。幸い学校が全面協力で、地域には子供の太太神楽などの伝統芸能もあり、受け入れやすい環境にある。ワークショップの継続が期待されている。